

玉川日記 四編 下

^ 13
3188
9



武振壹冊の内

門 へ 13
3188
巻 9

昭和 十 年
六月 二五
葉

松下

玉川日記四編卷之下

江戸

南仙舎楚満人作

算五回

天道不義の人を覆ひて地も悪逆の者も載せ
と又いとも天地の迫切るるを以て幸ふ免るる
事を得て暫く不義の後然り或る不義の賊を以
て富る者又あるくらねど天網廣くこれを圍みて
必しも漏すことなし。さしづば浮ぶる雲のごとく

聖人ハ是を喻シ。賊を貪り善を忘るハ。釣を
 吞じ臭のどく。徳の移り悪の好む。劔を踏虎の
 似たり。東方朔ハ戒めたり。爰の園田の村の中ハ
 古道具の賣買して実躰の暮と商客の夫的屋
 珍八郎といふものあり。一日ハ易き商ハ仲間立花
 屋といふものあり。四表八表の物譚して居たり。深
 谷の跋るる及具屋ハ叶を慾助といふもの。是も爰へ
 立より七種この古物あるとの甲乙を談ト新古を論
 暫く茶話ハ時が移りけり。主人ハ古き刀を取
 出。兩個の平して入り。是ハ人の是とて
 三糸の宗近ク作なり故あり。我ハ此に入。うごの
 順専らめられて。別して宗近ハ價高け。是ハ四辺
 あり。是ハ素直ぬもの由。此ハ母に教へて。初ん
 秘す。是ハとて。とらう。見する。あぞ其鼻。之も
 文織錦の袋の紐。二入。二人ハ
 珍八。いり。是ハ珍物。とて。

三十一 川四へん

珍八

芳いデ、ゆねを、よく助、八郎さん、そのあやう、何の、
あひてひくき、
かに銘鑑久、珍八、マア、そんまの、のサ、とうと、宗、近、

かろ、ひの、字の、紙を、ト、よんで、ある、よく助、「そと、子、と、

調法、る、木、と、古、今、刀、劔、銘、及、ひ、ろ、は、紙、紙、と、成、

る、と、これ、ハ、案、と、妙、と、あ、る、も、大、西、さ、ぬ、の、思、ひ、つ、た、と、

高、草、木、と、り、方、の、校、合、と、子、用、期、「ぞ、ん、と、い、は、の、

中、と、り、同、く、と、と、み、の、中、と、と、ま、ん、と、ハ、珍、八、「寸、分、遠、ハ、

ね、三、葉、の、山、渡、活、用、能、「あ、る、も、七、十、兩、の、價、が、付、と、

居、る、が、ま、ま、と、や、う、骨、が、折、と、わ、り、か、と、甲、綴、が、ね、と、

爰、ハ、一、ツ、エ、ま、が、の、を、も、さ、る、福、美、の、具、が、古、物、が、好、

では、解、古、画、の、掛、物、と、と、う、ね、と、居、る、が、信、る、内、

意、休、悪、く、る、の、物、と、ま、が、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、

前、より、五、十、金、も、ま、く、と、あ、ら、ま、る、と、り、の、の、の、の、

預、り、く、の、見、付、物、と、七、は、刀、と、交、易、の、あ、ら、ま、る、の、の、

珍、八、「そ、ら、あ、ア、い、ら、も、有、う、と、や、う、ね、入、り、用、能、「サ、

只、の、古、物、の、掛、物、と、何、で、も、お、あ、る、と、あ、る、と、あ、る、と、

三、川、四、八、八、下、三

が好び呼の画があののサ よ助 々々そら多るん

画がこのみどらう 用形 一鯉の画かゝりのとり入のサ

其の古き人が今後三十五名跡知つるど長向

多うことりめのもで三十六鱗のひらう 用形 一鯉の古画を

求めくある十一月の歳日とせら 用形 一鯉の古画を

だううままどふその入る 用形 一鯉の古画を

さあぬ実際一とも 用形 一鯉の古画を

たぬつのも 用形 一鯉の古画を

ぞん 用形 一鯉の古画を

あ 用形 一鯉の古画を

こと 用形 一鯉の古画を

價の高下と 用形 一鯉の古画を

る 用形 一鯉の古画を

久 用形 一鯉の古画を

何 用形 一鯉の古画を

宋 用形 一鯉の古画を

朝 用形 一鯉の古画を

中 用形 一鯉の古画を

別 用形 一鯉の古画を

七 用形 一鯉の古画を

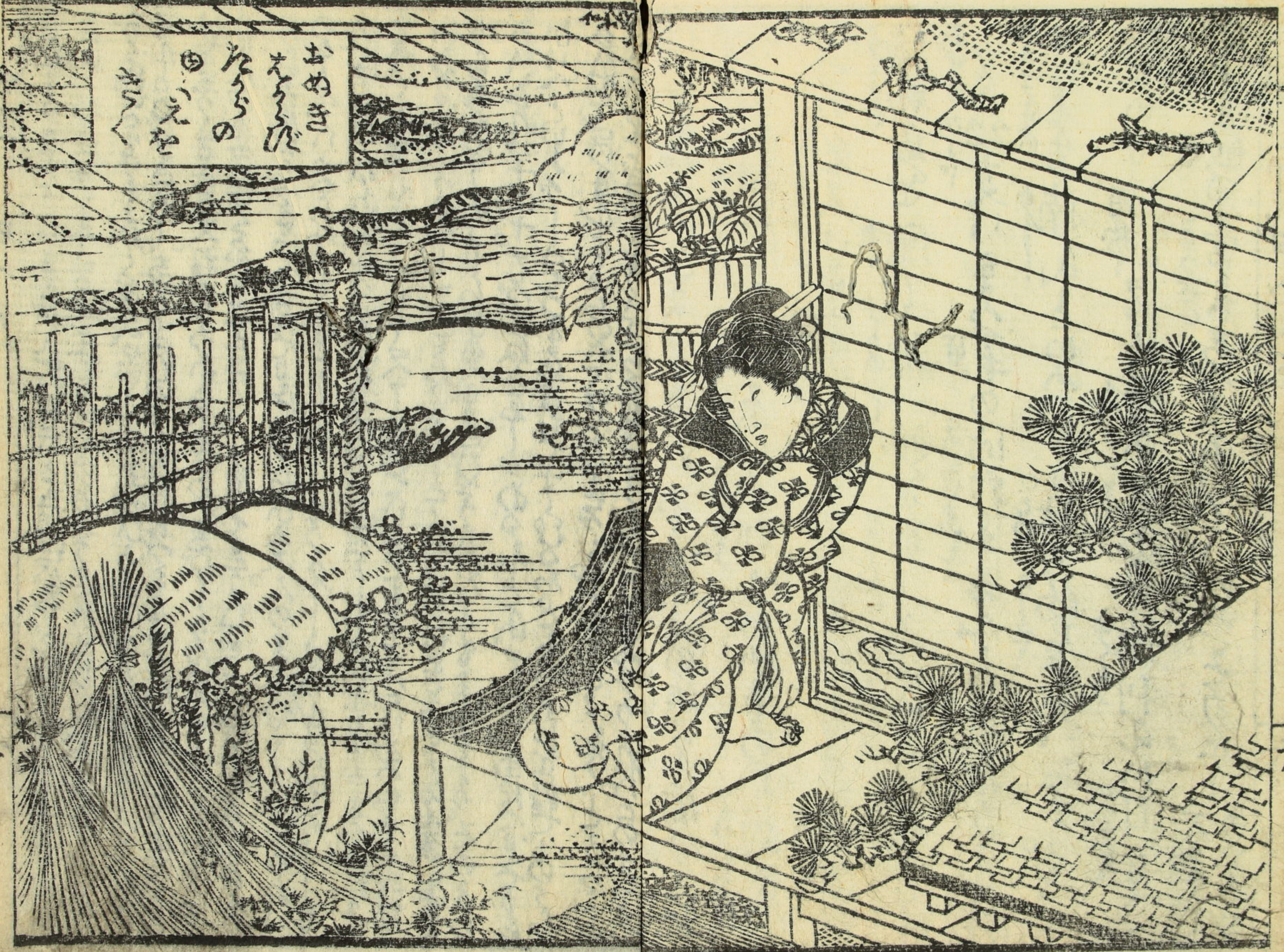
經 用形 一鯉の古画を

ても古入るれば上^{うしろ}身^みでさへわまびりくろ^ろ。何^{なん}でも
 うでも^うあつ^{あつ}く^くの^の物^{もの}なれば^{なれば}急^{いそ}度^どし^しの^のあ^あは^はづ^づく^くさ
 よく^{よく}八^{はち}の^の日^ひの^のあ^ある^るう^うみ^みその^{その}鯉^{こい}の^の画^えの^の掛^か物^{ぶつ}も^もい^い
 ら^らく^くの^の後^ごで^で多^{おほ}く^く古^こ今^{いま}獨^{ひとり}歩^{あゆ}の^の希^{まれ}有^あり^あら^らう^うを
 い^い物^{もの}が^があ^あり^りや^やさ^さ去^さる^る人^{ひと}が^が求^{もと}め^めと^と物^{もの}ぐ^ぐす^すた^たい^い上^{かみ}方^{かた}
 へ^へ持^もつ^つて^て賣^うり^りに^にて^て所^{ところ}が^がは^はな^な子^こ細^こが^があ^あり^りと^と賣^うり^りま^ます
 来^きて^ては^は急^{いそ}度^どし^し今^{いま}爰^{こゝ}に^にあ^ある^るの^のけ^けれ^れど。
 明日^{あした}も^も今日^{けふ}も^も持^もつ^つて^て来^きや^やせ^せう^う。多^{おほ}く^くと^とお^おい^いお^お後^ご

だが^{だが}交^か易^いに^にあ^あら^らう^うと^とや^やら^らね^ねく^く先^{せん}は^はさ^さく^くう^うら^らう^うと^とあ^あら^らう^う
 其^{その}時^{とき}の^の不^ふ簡^{かん}次^じ身^み又^{また}さ^さう^うと^とあ^あら^らう^うと^とい^いう^うら^らう^う
 その^{その}い^いの^の後^ごに^にあ^あら^らう^う。用^{もち}兼^あ一^{いつ}そ^そし^して^てさ^さう^うの^の出^で立^{だて}や
 又^{また}ど^どの^のい^いの^の後^ごに^にあ^あら^らう^うの^ので^で。よ^よく^く助^{たす}け^け。ま^まふ^ふと^と子^こは^はに
 る^る。ち^ちう^うと^とも^も氣^きづ^づひ^ひの^の有^あり^りの^のド^どや^やア^あ有^あり^りま^ません^{せん}是^{こゝ}
 お^お目^めの^の機^{はり}や^やせ^せう^う。珍^{めづ}八^{はち}一^{いつ}そ^そう^うら^らう^う一^{いつ}刻^{とき}も^もた^たま^まく^く。ア^あ
 実^{じつ}は^はは^は色^{いろ}の^のう^うら^らの^の後^ごに^にあ^あら^らう^うと^とい^いう^うら^らう^うと^とい^いう^うら^らう^う
 た^たく^くと^とあ^あら^らう^うと^とい^いう^うら^らう^うと^とい^いう^うら^らう^う。珍^{めづ}八^{はち}と^とれ^れは^はな^なら^らう^う

あつてバ私も爰に居て深々とをりてさううよく助あが
 さまがはらうとさまご—東の漢先生もんともさうと舌
 と揮つておそれとこの事と取てきくトしちは中てと
 ちくまうわあまのふとさかひい 珍い八つとあまのめでののり
 ませんり。あの格助めが所持して居るもの故あつては
 だ—「さバ是とより上るユまゆハい這奴はさうあの
 中ちの本片さぬとさういひお方が古刀をさぬいの
 ちやうといふと、殊ゆハい三糸家近の出来のよいま
 作しさバい價いのようまらぬやいのいのい不い圓いをい

幸いひいのい源い治い屋いのい堀い糸い伊い三い郎いといひいのいのいのい迎い来い名い
 ういていのい名い人い由い本い家いのいまいまいぐいみいのいまいにいういていをい先いをいせ
 慾い助いめいをい賺い被い一い抽いとい取い上いとい高い井いといるいへいとい
 上いるい秘い喜いハいまいるいもいのいけい程いまいるいんいとい用い卷いといんい卧い
 就い先い全い楠い氏いといひいといもい此い夫い的い屋いゆいハいちいといへいちいるい
 だいのい子い 用い卷い「いラいッいトい寝いふい耳いのいりい徳い利いゆいハい目い鼻いがい
 のいとい昔いのい常いまいちいづいろいふいノいハいひいついそいりいといトい
 用い卷い「いラいッいトい寝いふい耳いのいりい徳い利いゆいハい目い鼻いがい



だか。りらるる古いよぬ物もゆりゆせが やま「その御と
 からの画 まびびりうまをそとめる よく助「さあうく
それまかへてくぢりして やま「ハイウと外 まで
 なるりま ま「さ ま「洋 ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ
 みる ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ
 よう ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ
 旅 ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ
 志 ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ
 り ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ ま「さ

第六回

斯くも貴い たか「慾助が宿へいこう。その櫛 かみのの ま「さ
 果して日來 ひ「來 ま「か ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の
 色 いろ「あ ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の
ゆき錦膳 ま「中 ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の
 分 わ「く ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の
 代 か「代 ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の
 又して差 さ「上 ま「る ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の ま「の
 二二

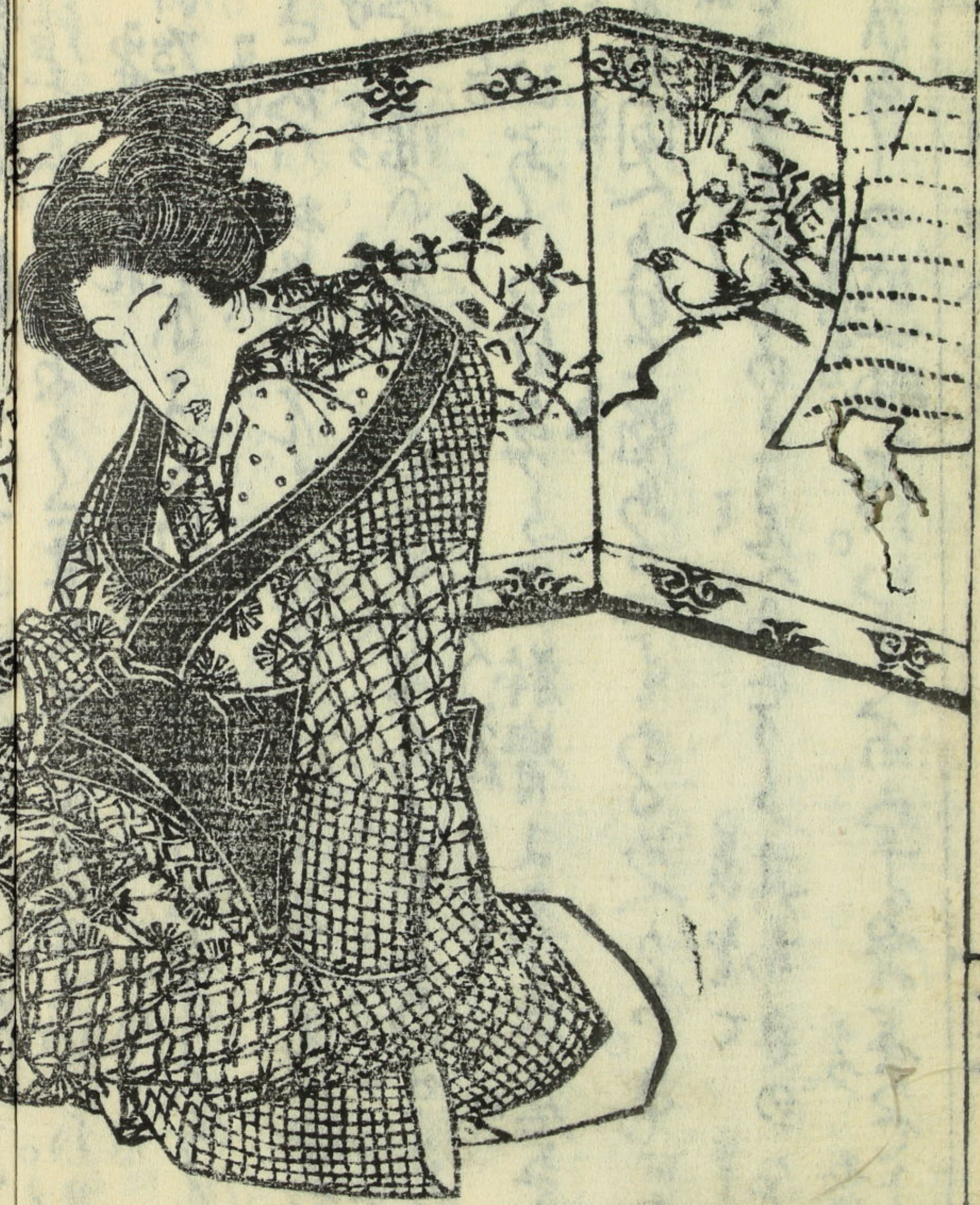
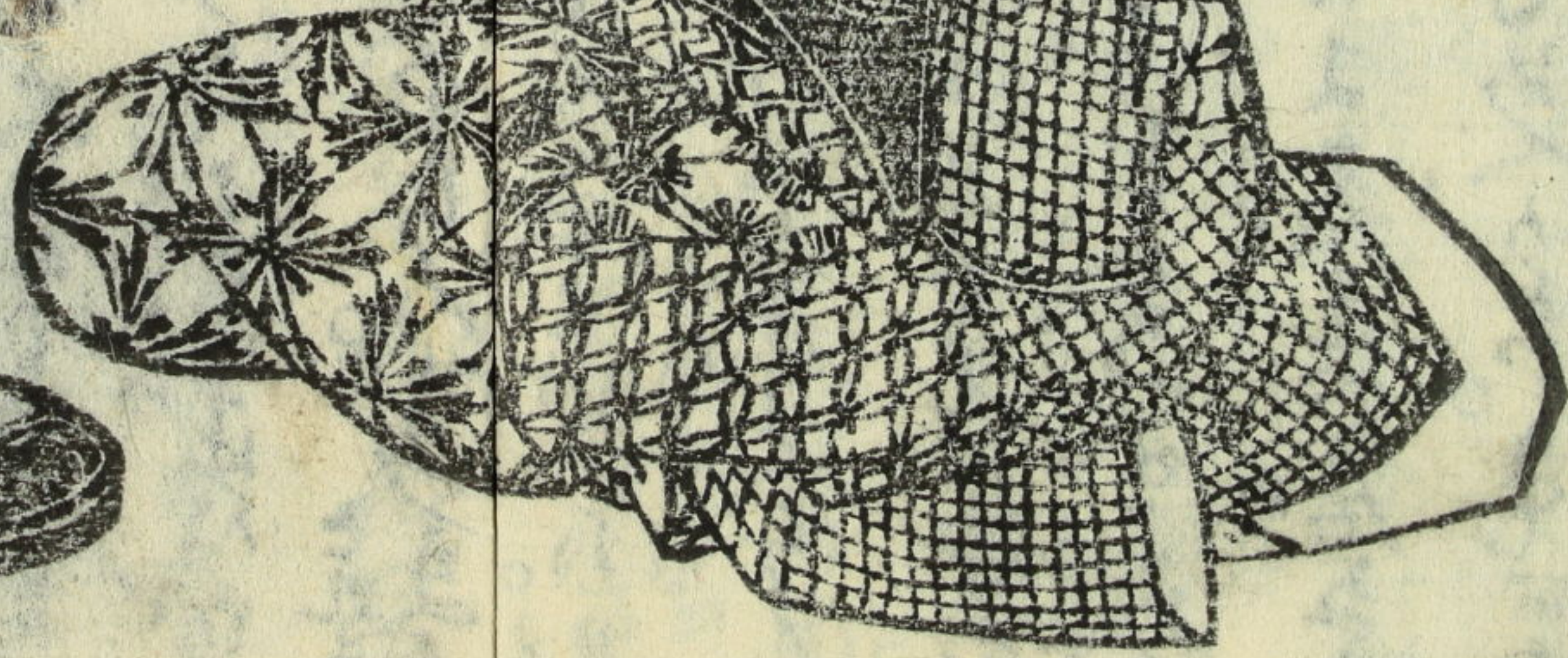
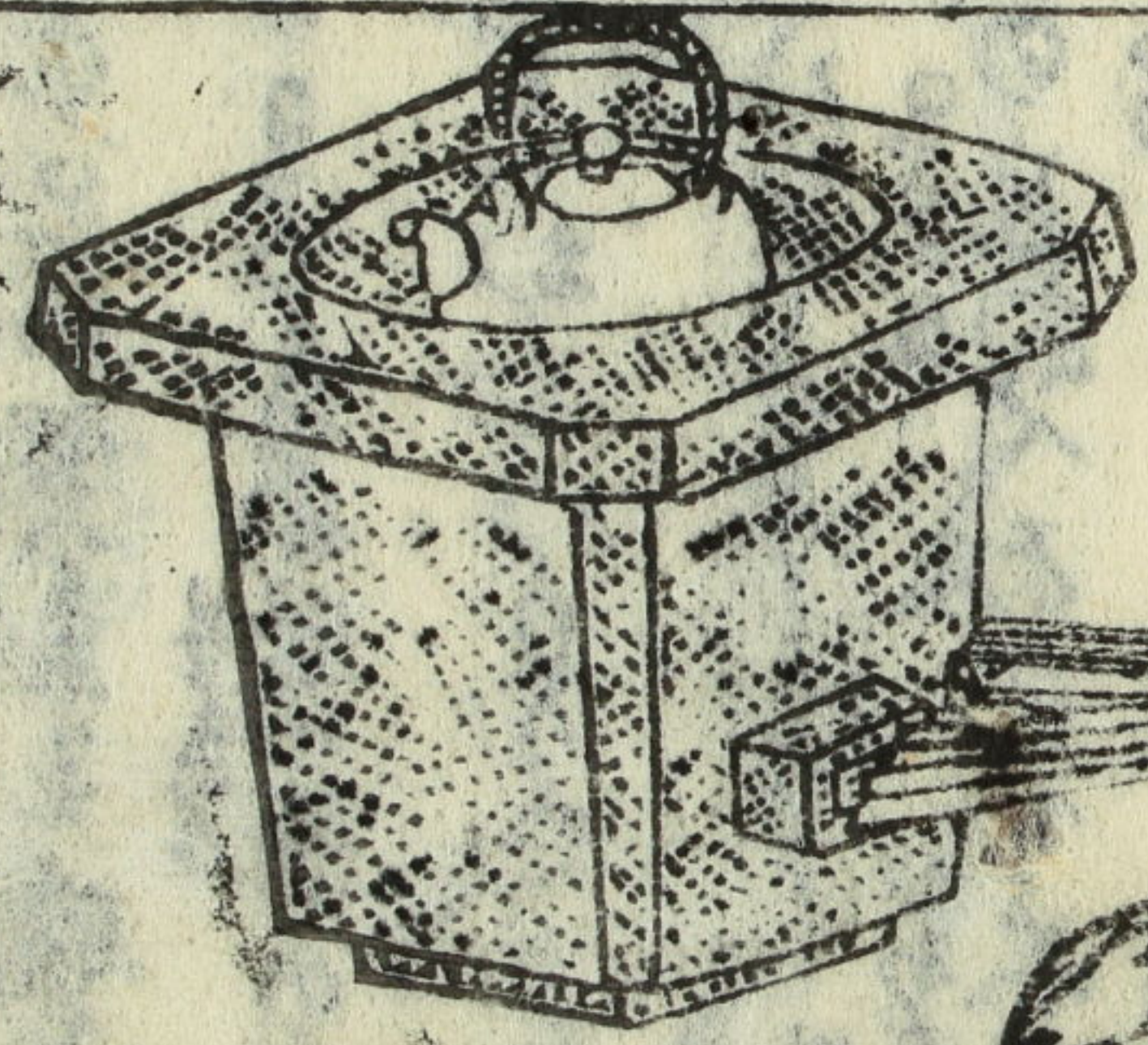
二二

二二

金が先差とりひまの丈の茶の代まるは合
 けりあくと捨てる人よた見こらげせんなるまが
 ひざら深谷の病ゆりふはあゆりあをとりひら果
 ちくゆひあるべくとあゆり人と罪は落し
 ささるも後をさるものくらぬのさるに
 かくてあも金がるのさるまも助ぬ難治の病我身
 とあもこのは償とさるの代ぬるさるいよあせあさ
 まるとなるとめく都合もあくとりうくふあひ
 購隠居るうしがその價けりらわごとと聞かた金

八十兩より肩らぬさるのさるあもくも貴がなる
 は慈助が面くまうひ并るるぬ白徒され人
 引や入賣的えんどのゆのふは安さるのよあらん
 うを慈助のひらびと身とさるさるあもくも合十
 さらん金六十あるごと入用さるすのあもくも
 由來は着病をするうらる八十あもくもあもくの
 武物と典物なりまの代さるあもくもあもくの

世に喜む
 若にわ夢
 道て忘つ
 今涙ふぬ
 志つら此
 舟はるの
 世のつら
 調の詠



一 弊ひうぐはす夫ゆのこやらた。たまふじぐうく。
 入らんごはの概ものより実なる時ふぬむく雲さ
 此あうもの氣味がとるよふ緊要のよたへ物物を
 中しては物への敷くむくつものむくねてとくうんご
 その品を用る珍珍ハとくうううう。取うくは家王
 は第あがるも屋敷の且ねくむげと大金のけ其性
 返ふ十四九日のひま入りのあふようくを内はく也亭
 所へ家色の卒八さんぬお前のこくへねんでも
 甘くひまへ氣はつひる。まづはひまのあやく
 金ちとてーやせとてーらひせつ。おまへの娘く
 うけ取く。あーらひひけが態助へ。そとくぬらる
 とうげまむまづおまへのむくのてあくへ入るは母もま
 宇く郎も深次郎へあふあふうむりたるのうくとおまへの
 ぐひの又あものうむあむ。まはあふのいんごうう部
 ぬあふあふのむ 宇く郎もあふあふうむりたるのうくとおまへの金を

こゝろ入るひのじり 夜半ササカニく。おいらいひなな
羊七梅入まーいふよろこ。是でいひのまのま。おいら
ぞおれ乗込。ぞの入まーいほうぞんどもままのる。宇
澤山からうらう。ずのぞんようろうと思ひら。ちんぎ
早くおぬのるせ入。ままふつとまら。し乗せうこま
がのる。夏の家のお卒八どのぬ。お備用がのる。まの
こ。そのうねのおぬ。迷惑とまらう。おま。いひのう。有ちり
が。そのおぬ。まらう。いらら。その国でまら。いひの

そして跡が。しら。ハ。又。し。が。一。所。や。一。お。こ。の。ま
らう。ずのぞん。うらと。進せ。ま。合。う。と。り。あ。ま。を。お。受。も。大
き。ゆ。よ。ろ。と。び。ぬ。ま。ま。れ。る。人。ハ。家。の。卒。八。ま。い
兵。の。か。り。ど。も。せ。ん。う。こ。ま。く。ま。づ。う。の。を。ま。ま。と。ん。と。思。い
野。入。卒。ハ。ハ。入。ま。り。卒。一。ゆ。り。葉。成。買。あ。の。う。入。ま。ら
買。う。つ。ま。ら。う。を。ん。ふ。明。る。の。を。鱈。葉。ハ。い。戸。一。の。名
バ。グ。牛。込。の。稚。子。坂。の。お。屋。で。製。を。ま。ま。と。り。ひ。ひ。ひ
て。宇。ノ。郡。を。夜。方。備。つ。と。あ。い。と。ま。ひ。け。ん。び。つ。う。り。と

立ち入り。そまじうりお夢ハ守郎小茶のちぢやい音大

ひ其通りうひさの入てあえんたり。その節あよの

あまの女まゐのよくするきり所あわらだ。〇と由又珍八郎と

用為の兩人ききハハ正録倉の者うて。ゞれもさう

あうの町人まあるが出入まのる愛ある由うさうのさ井

戸まあつうりは輕めろけもの今上つけのうさふ五

よ一由あ二人ともま心をあつせ是をん知て持系

まといのまれたる夏ゆあひあつあつあるものから

は研入まりま借家してひこすらひあをせんさく志

たさるるも。あつあおよくま身入るさくよ。まふ

よろこび二人よりあひてまける人。珍八さん

おまのまおまのまよおまろ感まびご井くまゐつと

のきのま津ま道具のまを毎へわんうらひまおま

奪まひまさるまがま右まあまのさる人さくあびてま是ま追ま厚まの

はあまさまがまかましまんま報まさるま助まけまあまるま。ゞれま且ま別まあ

たうそく 用器「はまやう」とまじく。先程ひつしツメをきう
 トりひよろとびぞくして。是より瀬をさるゝ
 よせく。たのりもさうのまらふ。その乃の日も平して
 すぐさる。隠食のあひひきなり。儲もあまのきを
 どの入。定。郎。合。相。合。貫。ひ。と。れ。と。進。め。る。の。ふ。其
 切。續。い。ち。ぢ。ぢ。日。の。中。全。收。あ。ま。の。れ。は。ま。の
 ぼび。さ。ら。る。の。物。さ。く。て。定。一。郎。の。厚。く。れ。と。の。再
 生。の。恩。報。報。い。なり。

① 世は深だ郎ハを彼せ。久。急。さ。る。ま。ら。久。少
 多んと。時。小。怒。助。事。り。て。お。貫。を。引。り。化
 松。坂。へ。傾。城。を。さ。ら。る。の。り。又。用。器。松。坂。郎。二。人
 ハ。彼。一。抽。を。高。井。戸。を。落。つ。の。り。と。ま。お。の。物。さ。る
 み。ぞ。大。の。り。の。暮。さ。る。深。は。郎。が。り。を。終。る。哉
 物。ハ。是。も。偽。物。ゆ。え。久。つ。と。身。の。害。と。さ。る。秘。伝
 たる。の。高。井。戸。を。落。つ。実。を。恐。心。の。り。す。一。抽。を
 探。し。中。七。深。は。郎。が。終。ね。は。る。の。り。其。父。子。を

故んとせざるゆゑとらぐくゆらぐくまふり。お
 愛がふもそを返と卒八をすうく彼かふり
 銀六 慈助市が方ふあゝるのをささぐり。終ふ
 て色を際及郎よりさしやう。銀六をバ戸在る
 加しゆもせしほひの事 團圓くゆせく終ふ
 事うかければ五編ゆりゆくと分明なり。

玉川日記四編卷之下終

筆者 音成

